

18	豊田	大蔵小学校	ムラカミ	タケル
			氏名	村上 武
分科会番号	17	分科会名	へき地・小規模校教育	

研究題目 地域で学び、友と高め合う大蔵っ子の育成
 -対話から深い学びを生み出す学習づくり-

研究要項

1 はじめに

本校は、全校児童21名（令和6年度）の小規模校である。児童数は年々減少しており、近年は、中・高学年は毎年複式学級、低学年も複式学級または少人数の単式学級として編成されている。

本学校区には、豊かな自然、歴史的な文化財がある。学校の裏には、徳川家の旗本・原田氏が建てた大蔵城の城跡がある。また、学校の前を走る、県道久木中金線には、県道が全面開通した際に100本のヤマボウシが植えられた『ヤマボウシ街道』がある。「100本の木の手入れを100年間続ける」という思いで、山法師の会の方々と協力して、街道の保全活動を続けている。また、読み聞かせやクラブ活動などには、地域の方が講師として参加していただき、地域に支えられた教育活動を展開している。

2 研究内容

(1) 主題設定の理由

本校の子どもたちは、素直で優しく、目の前の活動に全力で取り組むことができる。その反面、向上心や粘り強さに乏しく、難しい課題に直面すると、誰かが助けてくれるのを待ったり、あきらめたりする傾向が強い。これからの時代は、「正解のない問い」に向き合い、自ら答えを出し、その答えを信じて行動する力が求められる。そのような時代をたくましく生き抜くために、どのような課題に対しても簡単にあきらめることなく、自ら問いを見だし、多様な方法で調べ、他者と協働しながら、問題を解決できるようになってほしい、と私たちは願う。そのために、小学校6年間で、その素地を育む必要がある。一人一人の考えをより深めていくため、他者と協働することの必要性・有効性を学ぶために、「対話的な学び」に力を入れる必要があると私たちは考えた。自分の中にある考えを、相手に伝えることで、考えがはっきりとし、他者の考えを聞くことで、新たな見方・考え方を得ることができるはずである。このように考え、研究主題を「地域で学び、友と高め合う大蔵っ子の育成」とし、以下のように、めざす子ども像、仮説及び手立てを設定し、学校全体で研究に取り組むことにした。

(2) めざす子ども

他者との対話を通して、自分の思いや考えを確かにし、主体的に学びを深める子

(3) 研究の仮説

<仮説1>

地域の「ひと・もの・こと」を活用し、地域の特色と対話することで、地域との関わりが深まり、ふるさとに夢や誇りをもつことができるだろう。

<仮説2>

「問い」「対話」「振り返り」の大蔵スタイルを生かした学習を展開することで、対話することの価値を実感し、対話を生かして主体的に問題を解決していくようになるだろう。

＜仮説3＞

対話力を育む活動に継続して取り組むことで、思いや考えを受信・発信することのよさを実感し、進んで他者と関わろうとするようになるだろう。

（4）研究の手立て

＜仮説1に対する手立て＞

地域学校共働本部と連携し、地域のよさを生かした活動を行う。

（地域の特色を生かした活動、地域の人材を生かした活動）

＜仮説2に対する手立て＞

学びのスタイルを確立し、小規模校ならではの対話的な学びを生み出す支援を行う。

（「大蔵スタイル」を意識した学習づくり、足助研究グループオンライン合同学習）

＜仮説3に対する手立て＞

帯学習における系統的、継続的な取組を行う。

（「問答ゲーム」を中心とした対話トレーニング、全校対話集会、保護者アンケート）

3 研究の実際と考察

（1）仮説1に対する手立てについて

① 地域の特色を生かした活動

ア ヤマボウシ大作戦

毎年5月に、全校児童で、100本のヤマボウシの保全活動「ヤマボウシ大作戦」を行っている。地域住民で構成される「山法師の会」の方々と協力して、ヤマボウシの周囲の草取り、生育状況の観察及び、殺虫剤の撒布などを行っている。児童は3色グループ（異学年縦割りグループ）ごとに、30本程度ずつを担当し、作業を行った。総合的な学習の時間の一環として、3・4年生が中心となり、はじめの会や終わりの会を実施したり、やり方を説明したりして、活動を進めた。



【ヤマボウシ大作戦の様子】

山法師の会の方に方法や注意点を教わりながら、丁寧に一本ずつ観察や世話をする姿が見られた。各グループの5・6年生は、過去の経験を生かしてリーダーとして作業の分担や指示をし、1・2年生も、手順を教わりながら取り組み、縦割り活動のよさを具現化することができる。山法師の会の方々と一緒に体験し、対話することで、単なる作業に終わらず、保全の方法を学ぶとともに、地域のヤマボウシを大切に守っていこうという気持ちを高めることができた。3・4年生は夏以降も、ヤマボウシの観察を継続したり、地域の方とともに保全作業を実施したりした。活動後の振り返り（資料1）からは、地域の方との活動、対話によって、知識を得るとともに、人と関わることの大切さを感じている様子が見えた。

【資料1】活動後の振り返り（4年M）

Mさんのお話を聞いて、根に合わせて枝をせんていするんだなということが分かりました。私は、上を切ると育たないんじゃないかなと思ったけど、ちゃんと根に合わせているんだなということが分かりました。

イ 大蔵城跡に関する取組

5・6年生の総合的な学習の時間では、本校裏の大蔵城跡をテーマにして、追究活動を行った。現在では目に見える痕跡は残っていないため、最初は子どもたちの興味関心は低かった。しかし、地域講師から「城があったことを知っている人が少なくなっている。忘れられないようにしてほしい」という話を聞き、たくさんの人に大蔵城のことを伝えたいという思いをもった。そして、地域講師の方への聞き取りや書籍・インターネットによる調べ学習、復元された足助城との比較等を行い、調べたことを保護者、地域の方に伝える「大蔵博物館」を開催した。調べたことを模造紙にまとめることに加えて、現地での紹介動画を作成したり、城があった当時に使用されていた鎧の重さや槍の長さを体験でき



【大蔵博物館の様子】

【資料2】活動後の振り返り（5年M）

これまで調べてきたことを、家の人や地域の人に伝えられて楽しかったです。動画をつくったおかげで、分かりやすく伝えられたと思います。せっかく伝えたから、本当に登ってもらって、説明したことを思い出して、こうなっているんだな、と見てもらいたいです。

るコーナーをつくったりと、子どもたちが分かりやすく伝えようという意識をもって活動に取り組む姿が見られた。

活動後の振り返り（資料2）からは、地域に対する関心を高めるとともに、他者に伝えることの楽しさを感じ取ることができた様子が見えた。また、年度末には、城跡を訪れた人が見学をしやすいように、見学道の整備活動にも取り組んだ。必要な作業を考え、懸命に取り組む子どもたちの姿からは、地域に対する愛着を高めていることが分かった。

② 地域の人材を生かした活動

ア 家庭科・ミシン指導（教科学習）

教科の授業において、工作や習字、裁縫などの活動で、地域の方に講師としてご協力いただいた。5・6年家庭科「ミシンにトライ!」では、地域の方を複数名招き、ミシンの使い方の指導支援、作品製作の補助を行っていただいた。それまでは、特に初めてミシンを取り扱う際、児童は不安感を持ちやすく、作業がなかなか進まないことが多かった。しかし、地域講師の方に専門性を生かした指導支援を行っていただくようになってからは、1対1で指導に当たっていただけるという小規模校ならではの環境もあり、児童は早い段階で安心して作業を進めることができるようになった。また、手縫いの授業でもご協力いただいております。5年生、6年生の2年間で複数回の関わりをもち、「今年も一緒にがんばろうね」「去年よりも上手になったね」と講師の方々からも声をかけていただくことで、子どもたちの自信も回を重ねるごとに深まっていった。



【ミシン指導の様子】

教科学習ではその他にも、1・2年生活科でのリースづくり、3～6年の書写指導等、多数の授業で地域講師を招き、学習にご協力いただいている。

イ クラブ活動（教科外活動）

3年生から6年生の子どもは、例年、年間10回程度（前期5回、後期5回）、クラブ活動を行っている。地域の方を講師としてお招きし、「ポッチャ」「和太鼓」「将棋」などの活動を実施した。ふだんは、なかなかできない体験を楽しむとともに、地域の方との対話を通して、地域への感謝の心を育む時間となっている。活動後の振り返り（資料3）からは、知識技能を身に付けるとともに、意欲的に活動に取り組もうとする意識を高めている様子が見える。講師の方々には、全活動の最後に感謝を伝える時間を設定している。高学年が中心となって、手紙や色紙を準備し、講師の方に渡す活動から、感謝の心をさらに深めることができた。



【クラブ活動の様子（和太鼓）】

教科外の活動としては、その他に地域ボランティアによる読み聞かせも行っている。

【資料3】活動後の振り返り（4年Y・和太鼓クラブ）

足をざぶとん1まい分広げて、手をぴんぴんにのぼして、のぼしたまうつと、きれいな音が出ると分かりました。こうしの〇〇さんは、わたしたちにやさしく、分かりやすく教えてくれるので、みんなで楽しくできます。〇〇さんみたいに上手にうてるようになります。

（2）仮説2に対する手立てについて

① 「大蔵スタイル」を意識した学習づくり

ア 1・2年生活科「あきとなかよし（あきのあそびランド）」（授業の例）

授業づくりでは、「大蔵スタイル」（「問い」「対話」「振り返り」のサイクル）を意識した学習づくりに取り組んだ。子どもたちの思考を大切にしながら、柔軟に授業を進めることができる小規模校のよさを生かし、「子どもとともに学習課題を設定する」「対話を通して問題を解決する」「学習を振り返る」という流れを意識した学習づくりを学校全体で共有し、与えられた課題に取り組むのではなく、子どもたちが主体的に取り組めるような展開を意識した。

実際の授業の例として、1・2年生活科「あきとなかよし（あきのあそびランド）」を挙げる。この単元は、秋の自然を生かした遊びをつくりあげていくことを通して、子どもたちが工夫したり試行錯誤したりすることの楽しさを感じることを目標とした。そこで、学習課題として、秋の自然と



【園児との交流の様子】

の出会い、遊びの後に、隣接するこども園の園児に紹介する、という課題を設定した。それまでの生活科では、ただ楽しい活動ができればよい、という姿が多かった子どもたちであったが、課題設定により、自分たちの気付きや発見、自然を生かした遊びの楽しさを伝えたい、という意欲を高め、自分たちなりの目標をもって思考し始めた。実際に紹介の準備を始めるにあたっては、どのようなコーナーをつくるよいか、アイデアを話し合う場を設定した。話し合いでは、子どもたちからは、「どんぐりごまは種類分けしたら楽しめそう」「説明の文は短いほうが分かりやすい」と、園児が自然の遊びの楽しさを感じるためにはどうしたらよいか、対話を通して主体的に活動に取り組もうとする気持ちを高める様子が見え、対話をもとに、試行錯誤を繰り返した後の振り返り（資料4）からも、対話的な学びを通して、課題を見付けるとともに、協働的に学びを深めていることが分かる。

このように、学びのサイクルを意識した授業展開と、それを支える導入の工夫、効果的な対話の場面設定、他者の考えに着目した振り返りといった教師の手立てについて全校で追究していくことにより、各学級での授業を充実させていくことができた。

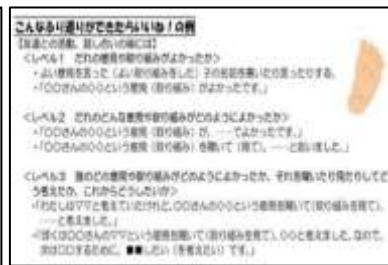
【資料4】活動後の振り返り（2年M）
 Hさんがどんぐりのくるまのタイヤがとれるからボンドでとめるといいよといってくれました。ともだちがたすけてくれてうれしかったです。

イ 「話し合いのツボ」「ふりかえりのツボ」

小規模校ゆえに、教師と児童の1対1のやりとりが多い傾向があったことから、児童同士の対話的な学びを充実させるために、各教室に「話し合いのツボ」を掲示し、全校体制で「話すこと・聞くこと」を大切にした学習活動の基本として児童にも意識付けを行った。



【話し合いのツボ】



【ふりかえりのツボ（一部抜粋）】

また、学習内容の定着を図るとともに、次なる追究への見通し・意欲につな

げるためには「振り返り」が大切である。「振り返り」においても、自らの学びを確認することに加えて、「仲間の考えのよさ」についても振り返るために、「ふりかえりのツボ」を作成した。これによって、仲間の意見を尊重する気持ちを高めるとともに、対話的な学びのよさを実感できるようにした。友達の考えや発言を振り返る機会を設定することで、少しずつ仲間のよさに目を向ける記述が増えた。

ウ 足助研究グループオンライン合同学習（全校）

小人数の学級では、発言の機会が多いというよさがある一方で、多様な意見に触れづらい。そこで、対象や規模を拡大した対話を行うために、「あすけ集合学習」に共に取り組む近隣4校（新盛小、萩野小、明和小、御蔵小）と、「足助研究グループ」をつくり、あすけ集合学習や各学年の授業で、ICT機器を活用したオンラインでの合同学習づくりに取り組んだ。実施に際しては、整備を進めたオンライン学習室での大画面への投影と、複数のマイク、大型スピーカーにより、相手校との一体感や臨場感を味わいながら学習することができた。



【オンライン合同学習の様子】

実際の授業の例として、5・6年国語科「語り合おう！あすけテクノロジー会議～『弱いロボット』だからできること～」の実践を挙げる。この単元は、人の手を借りることを必要とするが、人と人、人とロボットとのコミュニケーションを生み出すことができる「弱いロボット」についてまとめられた説明文を読み、物事を多角的に捉える力を身に付けることを目標とした単元である。この単元では、実際に「弱いロボット」の開発に取り組む企業の協力を得て、実物との出会いから単元をスタートした。そして、目標を達成するためには、多様な意見に触れ、考えを広げていくことが必要であると考

【資料5】「第1回足助テクノロジー会議」での話し合い
 大蔵小5年S：進歩すると、人間の仕事がうばわれてしまうと思います。
 新盛小5年K：仕事に影響がないテクノロジーは進歩した方がいいと思います。
 明和小5年M：同じで、介護をする人には、テクノロジーが必要だと思います。
 萩野小6年S：進歩してもいいと思うけど、使い方を考えることが大切だと思います。

え、「あすけテクノロジー会議」と称して、オンライン合同学習の場を設定した。会議は2回行い、1回目は「テクノロジーは進歩し続けた方がいいのか」をテーマに5校の児童で話し合いを行った。対話の規模を拡大したことにより、話し合いでは、多様な視点からの意見交流が行われ、目標とする姿に近づくことができた（資料5）。さらに、2回目は切実感をもって話し合うことができるようにするために、「これからの足助に必要なのは『弱いロボット』？『強いロボット』？」というテーマで話し合いを行った。2回目には、実際にロボットの開発を行った企業の開発者にもオンラインで参加していただき、児童の話し合いに対する感想を述べてもらった。授業後の振り返り（資料6）からは、さまざまな立場からテクノロジーについて考えることができたことや、自分の意見にさらに自信をもつことができたことについて書かれた記述が多く見られ、オンライン合同学習の場が、目標とする姿に近づくために有効であったと考える。

【資料6】授業後の振り返り
 ・ぼくは最初、必要なのは弱いロボットだと思いました。話し合いで、違う子の介護のためには強いロボットが必要、という意見を聞いて、人の立場によるなと思いました。（大蔵小6年S）
 ・ぼくは、意見はそんなに変化しませんでした。みんなの意見を聞いて、さらに自分の意見に自信をもつことができました。（新盛小5年S）

（3）仮説3に対する手立て

① 「問答ゲーム」を中心とした対話トレーニング

児童の中には、友達の前で発言することに不安をもちやすい子や、発言はできるが整理されていない子がみられた。そこで、「話すこと・聞くこと」の技能を高めることをねらいとし、さわやかタイム（15分間の朝の帯学習）を活用して「対話トレーニング」を実施している。トレーニングでは、対話する技能を身に付けるために、「問答ゲーム」を中心に行った。「問答ゲーム」は、ペア（グループ）で、対話を行う活動である。資料7のように、聞き手が設定された質問をして、話し手は自分の考えをまとめ、話型やルール（必ず主語を明確にする、最後に自分の考えを再度伝えるなど）に沿って、理由を加えて相手に分かりやすく説明をする。聞き手は、主張を正しく聞き取り、新たに質問をする、という流れで実施した。年間を通して、理由を2つ以上考える、反対の立場で考える、といった条件を段階的に設定していくことで、対話力の強化を図った。トレーニングを継続することで、対話の技能が高まった。トレーニングでの言い方を生かして自信をもって話すことができる子、順序立てて話すことができる子が増えたことから、トレーニングの有効性がうかがわれた。

【資料7】問答ゲームのやりとりの例

4年 K：あなたは給食と弁当、どちらが好きですか？
 4年 W：ぼくは弁当が好きです。なぜかという、好きなものがたくさん入っているからです。だからぼくは、弁当が好きです。Kさんはどうですか？
 4年 K：ぼくは給食が好きです。栄養のバランスがよいし、おかわりができるからです。
 4年 W：たしかに、給食は栄養のバランスがとれているからいいですね。好きな給食はありますか？
 4年 K：ぼくはうどんが好きです。具が入っていて、特にバランスがいいからです。

② 全校対話集会

各学級でのトレーニングで高めた力を、さらに発展、応用へとつなげていくために、月に1回程度、「全校対話集会」を実施し、異学年での対話を行った。当初は各学級で行っている問答ゲームを他学年の児童と行う時間としていたが、子どもたちの対話力の向上が見られてきた点、異学年とのつながりが深い小規模校のメリットをさらに生かすという点から、代表児童による話し合いに活動を切り替えた。「なぜ学校に行くのか」「お正月に家族や親せきと楽しく過ごすためにはどうすればいいか」など、毎回多様なテーマを設定し、各学年の代表の児童が話し合いを行った。話し合いの対話記録（資料8）のように、話し合いは教師の進行ではなく、高学年を中心に子どもたち自身がファシリテーターとなって進めていった。「反対の意見の人はいますか？」「納得した意見やなるほどと思った意見はありますか？」

【資料8】全校対話集会での話し合いの対話記録

「戦争をなくすにはどうすればいい？」
 5年 H：例えば大統領がいなくなれば、戦争は無くなると思います。反対の意見の人はいますか？
 6年 T：Hさんに反対で、国の中心になる人がいなくなってしまうたら、みんながまとまらなくて、むしろ人々の争いが起こると思います。
 5年 H：Iさんに質問で、自分以外の意見で、納得した意見やなるほどなどと思った意見はありますか？
 1年 I：わたしはTさんの言っていたことがなるほどなどと思いました。（中略）
 5年 H：話し合いをまとめると、戦争は…。

か?」「話し合いをまとめると」といった発言からは、話し合いの場を他者とともに考えを深める場として認識し、考えを広げたり、つなげたりして、合意形成をしていこうとする様子がうかがえた。また、各学年の代表以外の児童は話し合いを見学し、友達の発言のよさ、改善点などを伝えたり、振り返りに記述したりすることで、自分自身の目標とする姿を明確にしていった。全校対話集会を通じて、対話することのよさを感じ、進んで他者と関わって問題を解決していこうとする態度をさらに養うことができたと考える。

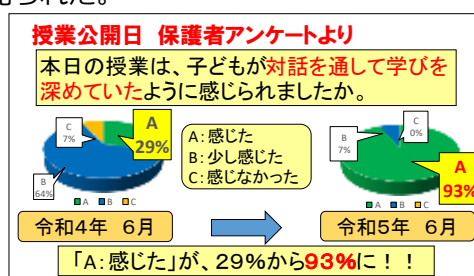


【全校対話集会の様子】

4 研究の成果と新たな取組

(1) 研究の成果

- ・地域と連携した学習を行ったことで、地域を大切にしようとする心を育むことができた。
- ・足助研究グループのオンライン合同学習では、学習意欲の高まりや対話力の向上が見られた。また、学びの規模を拡大できたことで、考えの広がりや深まりが見られた。
- ・「大蔵スタイル」を意識した学習づくりに取り組むことで、子どもが自らの成長を実感しながら主体的に学ぶことができるようになってきた。
- ・対話トレーニングの継続により対話を生かして学びを深める姿が見られるようになった。全校対話集会の取組により、進んで対話しようとする気持ちを高めることができた。
- ・保護者にも、子どもたちの対話力の向上や対話による学びの深化、充実を感じてもらうことができた。



【保護者アンケートの結果】

(2) 新たな取組

研究を進めたことによって表出した児童の姿や学習づくりの実態を踏まえて、学校全体として、さらに以下のことに取り組んでいる。この取組から児童の主体的・対話的な姿をさらに引き出していきたい。

① 地域の特徴を生かした活動の拡大・充実のために

今年度、地域ボランティアによる読み聞かせ活動の回数を増やした。子どもたちはさまざまな本にふれることで心を耕すとともに、地域の方とのふれあいの中で他者と関わることの楽しさを感じ取っている。また、学習においても、地域の特徴を生かした活動をさらに拡大している。3・4年の総合的な学習の時間では、ヤマボウシ大作戦だけでなく、ヤマボウシ街道の歴史を調べる活動や写生大会を実施し、活動を充実させ、地域に対する愛着を高めていく計画を立てている。5・6年生の社会科では、地域の農業法人と連携して、米づくりの体験活動に取り組んだり、農業法人による「赤とんぼ米」の栽培の取組を学習とつなげ、米づくりの苦労や工夫を学んだりしている。

② オンライン合同学習の継続・発展のために

今年度もあすけ集合学習及び各学年でのオンライン合同学習を継続している。昨年度末からは、基本的に大蔵小学校の教員を中心として実施してきたオンライン合同学習を、他校の教員をT1として実施する試みも行っている。T2として授業に参加することで、授業の進め方やICT機器の活用方法等について、新たな改善点も見えてきた。また、足助地区は10校の小学校が1校の中学校に進学する。そのことを踏まえて、今後は足助研究グループ校の5校以外の学校とのオンライン合同学習の実施や情報交換を通して、中学校進学を見通したつながりを広げていきたいと考えている。

③ 大蔵スタイルを意識した学習づくりのさらなる発展のために

子どもたちのさらなる成長を目指して、研究の成果と課題を振り返って、めざす子どもの姿の再設定を行った。加えて、各学年の目標を達成するための具体的な手立てを設定し、授業や対話トレーニングの実施に生かしている。また、めざす子どもの姿の具現化、対話力の向上を目指して、新たに「大蔵小対話術」を作成した。共感を伝えるための言葉、考えを引き出すための質問など、対話を通して学びを深めるために効果的な言葉を、成長段階に応じた内容でまとめた。今後、全校対話集会や研究授業を通して、手立てが有効であったかを検証していき、改善を進めていく。